

植村正久と金森通倫

——「新神学」問題を中心に——

田 代 和 久

はじめに

明治二十年代初頭という時期は、日本のキリスト教会にとり成人期をむかえつつある時期であった。明治初年以來、外国人教師、宣教師の指導下に成長を遂げた日本人キリスト者は、そこから「乳離れ」しつつあった。有為の青年キリスト者はそうした中で、日本人の主體的な責任において教会の独立と、神学研究の自由化を志向した。神学研究の自由化は「新神学」問題としてあらわれた。新神学各派の導入は外発的ではあったが、新神学それ自体は成人期をむかえ、外国人依存から脱皮しようとする日本のキリスト教会の内発的要請であった。今ここでとり上げる植村正久、金森通倫はこうした内発的要請に敏感に対応したキリスト者であった。しかし対応において両者は同様の認識に立ちながら、両者の得た結論はあまりにも対蹠的であった。

一

新神学とはある特定の神学体系を意味するものではなく、明治十

年代末期から二十年代初頭にかけて欧米から齎された、きわめて合理的な自由主義キリスト教の総称である。

その第一は、明治十八年、W・スピンネルの来朝とともに宣教を開始した「ドイツ普及福音教会」であったが、この会派は十九世紀のドイツ聖書神学を風靡したチュービンゲン学派の、聖書高等批評を基礎に合理的な教義解釈を特徴とするものであった。

第二は、明治二十年、A・M・ナップの来朝とともに活動を開始した「ユニテリアン」であった。「ユニテリアン」はその名の通り三位一体論(トリニティ)に対して、神の唯一性(ユニティ)即ち、キリストの神性を否定して、イエスの人間性を主張する英米を中心に起った宗教運動であったが、アメリカにおいて独自の発展を遂げ、アメリカユニテリアン協会はナップを使節(彼は「宣教師」Missionaryと呼ばれるのを嫌ひ、「使節」Envoy or Ambassador と自称し、「伝道」Mission のかわりに「宗教運動」Religious movement という用語を使用して、既成キリスト教との違いを明確にしていた。)として日本に送り、活発な宗教運動を展開した。

さらに、自由主義キリスト教としては、明治二十三年、アメリカ

「ユニヴァーサル」教会の派遣した G・L・ペリンによつて建てられた「宇宙神教教会」(後に「同仁教会」と改称)があり、カルヴィンの予定救済説に反対して「普遍的救済」(universal salvation)を主張した。新神学とは、これら自由主義キリスト教三派によつて齎された神学傾向の総称であつた。これら三派は他のプロテスタント各派が同系統のものが合同して一教派を形成したように、自由キリスト教としての一教派を形成することはなかったが、各派の間では宣教師、伝道者、雑誌編集及び執筆者の交流によつてきつめて緊密な協力關係を保つていた。

これら三派のうち、とりわけ「ドイツ普及福音教会」、「ユニテリアン協会」は聖書や教義に対する合理的解釈、さらに日本の宗教や精神的伝統に対する包括的態度において、それまで宣教師によつて説かれた聖書無謬説や、單純素朴な天啓説あるいは奇跡、復活、贖罪等の非合理性に飽きたらぬ思いを懐いていた青年、学生、知識人層を中心に強い共感を呼び、その余波は既成のキリスト教会を巻き込む「神学上の波瀾」となつて顯れた。

言うまでもなく、欧米における自由主義神学の誕生は十八世紀以来の啓蒙主義の思想的潮流や、それを基盤に成立し、十分成熟した近代市民社会の土壌の中で、哺まれた合理主義を背景にしたものであつたが、そうした思想的潮流も基盤も欠いた明治二十年代初頭の日本のキリスト教会にとって、自由主義神学は自己の信仰基盤の崩壊をもたらす恐怖以外のなにもでもなかった。既成キリスト教会の新神学への対応の様は、「初め『異端』であり、次ぎは『合理主義』Rationalismus 次ぎに『自由基督教』次ぎに『新神学』であ

つた。そしてこれらは皆な恐怖すべく、憎悪すべきもの、信仰を薄弱ならしめるもの、と異名同義に用ひられる合言葉」であつたという。

しかしながら、当初、新神学の活動はその合理性と包括性において福沢諭吉、中村正直、加藤弘之、杉浦重剛等を含む多くの知識人層の支持を得たとはいへ、あくまでも文化としてのキリスト教という側面が強く、既成キリスト教に対する最大のボレーミクは、『六合雜誌』に登場した金森通倫の新神学論文と、その著作『日本現今之基督教並ニ将来之基督教』であつた。それまで新神学問題は多くの反響、議論を呼んでいたが、それは既成キリスト教と新来のキリスト教の対立という形で顕在化したのに対し、金森の問題提起においてはじめて新神学問題は「宗教上の問題」となり得たと言っても過言ではない。なによりも金森は既成のキリスト教会の中でも、日本基督教会と並び有力な組織であつた、日本組合教会の現職の牧師であり、一時は新島襄の後継者とも目されたこともあるキリスト教会の大立物であつたから、彼の公然たる新神学の旗幟の表明がキリスト教会内部に、如何に大きなセンセーションを巻き起したかは想像に難くない。金森の新神学的立場の総決算ともいうべき『日本現今之基督教並ニ将来之基督教』は、四六版百五十九ページの小冊子ではあつたが、その反響は、「キリスト教徒間の意を聳動したるのみか、世間の新聞雜誌にまでもその影響を及ぼし、その批評頻々として百出」し、初版一千部は一週間にして売切れ再版二千部が売り出された程であつた。

金森は、小崎弘道が『六合雜誌』(一〇三号、明治二十二年七

月)に「聖書のインスピレーション」と題して、高等批評による「聖書無謬論」否定の論文を発表した際、小崎批判の急先鋒の一人であった。当時、同志社にあった金森は、明治二十三年三月、小崎の第二代同志社社長就任とともに同志社を去り、同年七月上京、『六合雜誌』を舞台に新神学キャンペーンを展開するとともに、同年十一月、小崎の後任として番町教会の牧師に就任した。

こうした中で金森の新神学への傾斜は激しく、翌二十四年四月、番町教会牧師を辞任し、翌五月三日発行の『国民之友』一一七号の特別寄書として『日本現今之基督教並ニ将来之基督教』を発表、さらに同年六月十二日、一書として出版した。それ故、この二年間に涉る正統主義から新神学への金森の思想的軌跡³をあきらかにするには、『日本現今之基督教並ニ将来之基督教』に至る過程として、『六合雜誌』に発表された彼の見解を検討する必要がある。

金森は上京とともに『六合雜誌』上に登場し、明治二十四年九月『六合雜誌』一二九号を最後にその名前は誌上から忽然と消え去ったが、この間彼は六篇九回⁴に涉つて新神学問題に対する、自己の見解を発表していた。金森は明治二十三年七月から翌二十四年九月までの期間、新神学問題と真正面から取組み、全精力をそれにつぎ込み燃焼し尽した感がある。

今こゝでは、『六合雜誌』に発表された論文のうち、特に植村正久との関係において重要と思われる「宗教社界の鎖国主義」、「神学の議論と信仰の生活⁵」について、その内容を検討して行きたい。

二

金森は先づ鎖国主義が知識の相互交流を阻み、人類の文明の進歩発達にとり有害であるにもかかわらず、キリスト教の世界のみが、「今尚頑固鎖国主義を固守」し、「教会の四門を鎖さして全く思想交通の自由を絶」ち、「思想の自由は雄飛すべきの天地を得ず、今尚籠中に苦しむ」状況は、「実に嘆息の至りなり」として、その理由を次のように述べている。

神学及び信条なる者ありて、恰も各派の城壁とでも云ふべき様をなし居るなり。是によりて、其派中の人々若し其派の神学或は信条と異なる所の信仰を懐き、若くは議論をなす者あれば、警察官が科人を探出して此を法庭に訴へ、其処刑を請求するかの如く、譬ひ如何なる篤信の信者にても、又如何なる高德の君子にても遠慮会釈もあらばこそ、直ちに此を会外に放逐し、或は其伝道を差留むるなど随分醜体⁶を示す事も多かるなり。

金森はこゝで自派の神学、信条を絶対化し、固陋化したキリスト教会各派の現状を、烈しく非難したのであるが、こうした同時代のキリスト教会に対する現状認識は植村正久においても同様であった。明治二十三年三月『福音週報』所載の「信条制定に関する意見」の中で、彼は次のように述べている。

古人の定めたる神学に泥み、区々たる信条に束縛せられ、宗教の議論に至りては百事保守の地に立ち、頑然古を仰望して、敢えて進歩の途に就くを嫌悪す。余輩未だその可なるを知らず。

(中略)細密なる信条の弊狭隘なる神学の害怖るべきものあるを知れり。

保守的な神学思想、信条墨守のキリスト教会の現状に対する両者の批判が、軌を一にしていることはこれらの引用で明白であろう。

さらに、こうしたキリスト教会の現状打開の方法においても両者は共通の認識に立っていた。金森は次のように述べている。

今や日本の神学者は、外国宣教師の助によらずして、汲々自ら其神学を研究し居る者なり。加之、欧米の新聞雜誌及び書籍の類は自由自在に、日本に輸入出来れば、殊更に宣教師の手を経るまでもなく、直ちに欧米に於ける神学思想の大海に身を投じて、自ら其蘊蓄を採らんと欲しつつある者なり。

一方、植村は次のように述べる。

余輩日本の基督教徒たるものは、神学の新田を開拓し、欧米の短を棄て、その長を採るにおいて最も都合好きものなりと言わざるべからず。日本神学の基礎を立て、その方針を定むる実^{じつ}に今日に在りとす。漫りに外国の糟粕を輸入し、また好んでこれを甜^{なま}らんとするに至りては、余輩深くこれを遺憾とせざるを得ず。

両者は先づなによりも外国宣教師の直接的な影響下から脱皮して、日本人キリスト者の自負と責任において、新神学問題に対処しようとする点において一致していた。特に信条や神学に対する植村の自由闊達さは、後に福音主義、正統主義の驍將と目された人物とは思えない程であるが、キリスト教会の現状に対する新神学の問題提起を、彼は積極的に評価しつつあったことの証明ともなるう。

金森はキリスト教会の大勢は、「先祖伝来の神学説及び信仰の糸目を固守」して、「ユニテリアンの書物は、害ありて益なし、信者は成るべく此に触れざるを良しとす」と云ひ、或は独乙の神学は自由過ぎるなり、此を学ぶは信仰を冷やすの恐れあり」などの「通弊」に陥入り、その結果、「宗教世界の思想は甚だ自由の働を妨害せられ、卑屈なる奴隸的の境界に苦む者」となったと理解した。そして金森はこうしたキリスト教会(界)の閉塞状況を打開するのは、ただ「思想の自由」なるものによって発見された「真理」に依る以外にはないとして、次のように述べる。

抑思想の自由なる者は、其発見する真理の結果如何に拘はらず、又よし一時は如何なる影響を社界に及ぼすことあるも、更に此等を観る事なく、只真理の雲の柱と火の柱が導く儘に引かれ行き、其留る所に至て、始めて止まるべき者なり。結果や影響に彼は掛念^{つら}して、真理の導に従はざる間は未だ以て思想の自由を得たる者と云ふべからず。今の宗教社界の思想界に於て、最も欠乏する所の者は、此大胆勇進の氣象なり。

ここには理性に対する金森の全幅の信頼が直截に語られている。

彼の合理主義は、「卑屈なる奴隸的の境界」＝正統主義に甘んずることは出来ず、真理の導くままに「思想の自由」なる園＝新神学へと旅立ちの準備をはじめつつあった。そして金森は理性によって獲得された真理は、「是迄各種の堤防を悉く破り尽し、今將に神学海の堤防をも破壊せんとするの有様なれば、譬ひ幾千万の頑固神学者が此の堤防のみ砕かるべからず、砕かれては大変だと命限りに防衛するも、到底甲斐なく早晚此処をも破壊して、古びれたる中古の謬

説を推し流し、宗教世界の面目を一新する」と述べ、合理主義の立場、新神学の立場の勝利を予想した。

金森にみられる人間理性や真理に対する信頼の念は、一方、植村においても同様に述べられていた。

思うに、今の伝道者のなかには旧来の僻説に束縛せられ、種々の問題に対して己れの一身を処する方法に窮し、人知れずひそかに心を悩ますもの無きにあらざるべし。およそ宗教上重要な事柄につきかくのごとく危疑の間に彷徨するは伝道者に取りて最も難儀なるものなり。頑然として信条に拘泥するものよ。汝は何をもつて、この不安心を治療せんとするや。神学上の議論においては、成るべく謹厚の精神を維持することを必要とすれども、今のごとく、右に顧み、左に氣遣い、ひたすら古に跪きて、神学上現今の問題を、漠然のうちに捨て置かんとするは勇氣あるキリスト教徒の素志に反することにあらざるや。真理は高明なり。曖昧をもつて城壁となすものにあらざるべし。余輩は神学上諸種の問題に関して自由なる研究をなさんと欲す。(中略)今や余輩は神学上の波瀾澎湃たるに遇いぬ。いやしくもその信仰の理由を明らかにせんことを務むるものは、この際その議論を避けんと欲するも得べからざるなり。(中略)キリスト教徒はわが信ずるところを明らかにし、確実にせざるべからず。わが心に疑わしと思うことはこれを疑題に倣して講究せざるべからず。信ずることを厚く信じ、知らざることを知らずとし、疑わしきことは真実に疑うべし。⁽⁸⁾

金森、植村の両者はここで、明治二十年代という時代の変革期に

際して、日本のキリスト教会もまた内に日本人キリスト者の主体的責任意識のめばえ、外に新神学の到来という新しい胎動の中で、従来の外国依存的体質をあらため、独立自主の精神を喚起する点において共通するものであった。そのための条件として、なによりも神学や信条に対する自由な研究、自由な議論の展開こそが要請されるしたのである。その意味で両者の時代認識、キリスト教会に対する現状認識は共通するものであったが、両者の違いもまたそこに反映されていた。同じく自由な研究、自由な議論を標榜しても金森は旧神学を否定する方法として用い、積極的に新神学への旅立ちを準備しつつあったのに対し、植村は伝統的教義を再吟味し鍛え直す方法として、自由な研究、自由な議論を主張したのである。植村は新神学の問題提起を積極的に受け取めることを通して、旧神学の再構築を計るという方法を選ったのである。

これ以降、両者の歩みは対照的であった。金森は新神学へと積極的に踏み出し、旧神学批判の急先鋒として活躍したのでに対し、植村は新神学の攻勢を受け取めつつ、旧神学にとどまり福音主義信仰の確立へと歩み出したのである。この間の事情を『六合雜誌』所載の論文「神学説と信仰の事実」(植村正久、第一一三号、明治二十三年五月)、「神学の議論と信仰の生活」(金森通倫、第二二〇号、明治二十三年十二月)においてみてみたい。

三

植村の「神学説と信仰の事実」は、ある人から、「贖ノ教理ニシテ真理タラバ、之ヲ真理トシテ確信セシコトヲ欲スルヤ切ナリ。唯

余ノ理性ハ其理由ヲ請求シテ止マズ。余ニシテ之ガ理由ヲ解シ、確固タル信仰ヲ有スルニアラズンバ、余ノ信仰ヤ実ニ危シ」という質問を受けたのに対し、この質問を一般化し「神学説と信仰の事実との関係」から自己の見解を述べたものであった。

彼はそこで「余輩は基督教に付深く思ふに従ひ、益神学説と信仰の事実とは自ら別物なるを感ずるに至れり。且その別物たることを常に心に明白にするの必用を感ず」と述べ「神学」と「信仰」とは次元のちがうものであるとしている。しかしながらこの両者は、たとえ別物であってもその間には、「神学説は骨格にして信仰は筋肉五臓」あるいは「信仰は燈火なり神学説は行燈の壁紙」の如く、神学説はキリスト教信仰を反映したものであると、植村は理解していた。それ故、彼はあくまでも「神学」に対する「信仰の事実」の優位を主張する。

キリストは実に世の救主なり。キリストを信じ且愛しキリストの心を以て心とする処のものは、すでに其罪赦されて神の子となれり。如何にして其罪は赦されしや、曰くキリストを信じたるが故なり。凡てキリストを信する者は何故にこの罪赦さるる乎。曰我これを知らず。贖罪の理を知らずと雖もこの事実を信せば可なり。その理を知るより善きはなし。然れども其理を知らざるもこの事実を得ば可なり。

植村はここでキリストを救主として信じ、キリストの贖罪によって自己の罪は贖われたという信仰体験こそ、信仰の事実として肝要であるとした。こうした彼の理解は「三位一体論」においても同様であった。

父、子、聖霊の三ベルソナあり。而して此三位は一なりと云ふは、如何なる想像を以て理解し得る乎。我輩もし未だ理解し得ずとて信仰危しと云はば、我輩の信仰は理解し能はざる処の道理の上に立てりとなさざる可らず。然りと雖もキリストは神の満てる人なり。キリストの言行は神の言行なり。キリストを見るは、これを神を見るなりと云ふはこれ信仰の事実なり。この事実確乎として存する間は、三位一体の理論の分明ならざればとて心配するを要せざるなり。

植村は信仰の事実こそがキリスト教の生命であり、神学はせいぜい信仰の事実を説明し解釈するものに過ぎないという理解に立っていたのである。彼は「聖書のインスピレーション」についても、次のように述べる。

聖書は神の「インスピレーション」に係る歴史教誨及び人物の伝を載す。因て之を読む者は神を知り、キリストに交はり救を得るに至ることは事実なり。然れども聖書の記載法に於て神の如何の導ありしやに至りては神学説なり。

植村はここで、聖書において神の啓示は示され、その啓示の中でも最も重要なキリストの十字架の贖罪のうちに、人間は神との人格的關係に出会うという聖書の信仰を「事実」として受入れ、聖書の編集や記述において神の啓示が如何に示されているかという議論（新神学の歴史的批評的方法）は信仰の事実にかかわることではなく、神学の解釈の問題であると理解した。こうした植村の理解には、聖書に記載された神の啓示のうちに自己の信仰体験の事実を確認しようとする、きわめて福音主義的立場をみる事が出来る。

これに対し金森の「神学の議論と信仰の生活」は先の植村の論文を意識したものであることは、そのタイトルからして窺れるが、金森はここで明白に植村と一線を画する。

金森は先づ新神学問題が単に日本のキリスト教会における問題ではなく、欧米においてもルターの宗教改革以来、最大の宗教問題であるとし、欧米の宗教問題の余波が「基督教の新聞報地なる我国の基督教社会にも及ぶ」に至ったものであるという時代認識を示し、次のように述べている。

我国の信者達は近頃までは、各伝教師に就て教えられたる儘、敢て疑を懐く事なく従順に是を守り来りしが、是は之れ我国に於る無邪気なる信仰の幼少時代なりしならん。然るに今やユニテリアン派入来り、批評的独逸神学も渡来し、又当時流行の新説主張者も起りて、將に神学海に於て大なる風波の起らんとする兆頭はれたり。此に於て多くの人々は周章狼狽己が神学説に動揺を受ると、偕に併せて其信仰をも失はんとす。又或者は頑固にも是等の新説を主張し、異説を唱ふる者を見て彼は異端なり、是は妄論なり、彼は信仰の墮落者なり、是は惡魔の手先なりなど切りに是を非難して、神学世界より思想の自由をも奪はんと試る者あり。

こうした状況を前にして、金森は「神学上の議論と信仰の生活との大関係につき兼て懷抱する所の意見」を開陳したのである。彼のこの兩者の関係をめぐる認識は、「神学上の議論と信仰の生活とは直接に於ては殆んど無関係の者なり」というものであった。彼は人間生活の全体に涉つて、「学問上の智識と實際上の生活とは（中略）

密着なる関係を有する者にはあらざるなり」とし、特に「神学」と「信仰」の関係において顯著であると述べている。こうした立場から金森は伝統的なキリスト教の教義自体への検討に進んで行く。

先づ「三位一体論」について次のように述べている。

昔より神学上の問題に於て甚だ八釜敷かりしは、三位一体の議論なり。扱て此の三位一体の問題に付ては一とつの神に三つの位があると説くも、又は一とつの神に三つのペルソナありと説くも、又一とつの神に三つの意識ありと説くも、或は一とつの意識ありと説くも、又独一の神が三様^{みよ}りに顯れ給ひしと説くも、其説方の如何によりて吾人が信仰の生活に果して何程の關係がある、吾人の信仰に直接の關係ある事は天父を愛し、イエスキリストを愛して聖靈の恩化に預る事なり。三位一体の關係の如きは學説として随分緊要なる問題なれども、實際の信仰に於ては殆ど無關係の者なり。

金森は「三位一体論」は信仰生活とは「無關係」であるとしてこれを否定した。同じく「三位一体論」の理解において、植村はキリストの贖罪という聖書に啓示された神の事実の解釈として捉えたのに対し、金森にはそうした理解は皆無である。

さらに、「キリストの品性」につき彼は次のように述べる。

キリストの人物に付ても随分議論八釜敷かりしが、仮令ひキリストは神なりと信するも、神キリストの中に在せりと信するも、又神よりも少しく劣れる者なりと信するも、神と同一なりと信するも、或は完全なる人なりと信するも、其性質論は救に關する者にあらず。只キリストを愛するのと否と、彼を學ぶと學

ばざるとのみ、吾人の信仰の生活に關係あるなり。

金森は「キリストの神性」に神の啓示を認め、そこに贖罪の根拠も、信仰の事実も存するという福音主義の立場を斥け、いわば歴史上の存在としてのイエスの言行に学ぶことによつて、イエスを規範とする處に信仰生活の意味を見出そうという立場を明確にしたのである。彼はイエスを救済者 $\parallel$ キリストとは理解せず、最高の倫理規範 $\parallel$ 人間として理解したのである。新神学の教義の中核はキリストの神性を否定し、キリストを史的イエスとするものであったが、ここにおいて、金森はキリストを神と告白する旧神学の福音主義と明確に訣別したのである。彼の「キリスト」理解が以上のようなものであれば、「贖罪論」はキリストの十字架によつて人類の罪が贖われたという福音主義的理解とは異なるのは当然であつた。

十字架の贖罪にても或人は是によりて神の法律を彌縫するなりと云ひ、又或人は是によりて神の愛を顯はすなりと云ふが、吾人の生活に必要なは此十字架に關係する學說にあらず。只パウルが所謂のキリストと偕に死して又彼と偕に甦る事なり。即ちキリストの其身を十字架に釘^つ給ひし如く、吾人も亦旧き罪の身を十字架に釘て罪と全く死別することなり。

次ぎに金森の「原罪論」をみてみたい。

原罪論に付てアダムの罪が遺伝したとの説もあり。又遺伝したるに非ず、是により其子孫たる我々が罪を犯す者となりたりとの説もあり。或は彼の罪と吾人の罪とは全く無關係なりと信する者もあらんが、兎に角にも吾人は罪人なり。而して此罪は吾人の罪なり、其責は他人に帰すべきにあらず。必ず吾人自らは

を受くべき者なれば、只速に是を悔改むるの外なし。

彼はここで「原罪」の存在を認めてはいるが、「原罪」からの解放をキリストの贖罪とキリストへの信仰という立場から捉えるのではなく、キリストの言行を規範とする人間的努力に求めた。

最後に金森は「聖書」について、次のように述べる。

聖書には多少誤りあると信ずるもあり、或は全く誤りなしと云ふ者もあらん。或は記事には誤りあるも教義には過りなしと云ふ。又教義にも記事にも多少過あるを免れず、只聖書は吾人の救に關する真理を示す者なりと信ずる者もあらん。然れども是等の説の如何によりて其人々の救に影響すべき者にはあらず。只此影響する所の者は其聖書にある愛神愛人の誠を守ると否とにあるなり。

金森は聖書における神の啓示を否定し、信仰生活の実践にとつて聖書に記載されたキリストの言行をいわば誠として守ることこそ、有益であると理解した。

植村は「神学」と「信仰」の關係につき両者は區別されるべきものであるとしたが、聖書に啓示されたキリストの贖罪を信仰の事実として認め、そこに神と人間との人格的關係の成立を認めていた。

金森も同じく信仰の事実を強調したが、それは聖書に啓示された事実というよりも、むしろ自己の主體的な宗教体験を合理的に把握することによつて得られた信仰の事実という性格が強くうち出されたものであつた。それ故、金森の信仰の事実からすれば、「如何なる宗派に屬する者にて、又如何なる神學説を唱ふる者にて、苟も眞実に神を愛しキリストを愛し、又其誠を守りて兄弟を愛する人

は、余は此人を指して真誠のクリスチャンと云はん」ということになり、逆に

譬ひ口には正統神学派と唱へ巧みに神学上の議論をなす者にて、も、若し其心に愛神愛人の徳なき人は是こそ所謂の偽善者なり。其正統神学果して何の効用がある。(中略)自ら正統神学者なりと称しながら、其兄弟を愛すべきの実行に於て正統ならざりし正統神学者こそ、却て天国の教会より放逐せられたるやも知るべからず。(中略)天国に入る者は只神学の正統なる者にあらず。実に信仰の生命ある者のみなり。而して此生命を得る者は、神の賜ふ霊の糧を取て是を食ふにありて、其分析学にはあらざる事を知るべし。

として形骸化した正統主義の信仰に対する痛烈な批判ともなったのである。

そして金森は前述の教義自体の検討を踏まえた上で、今後、日本のキリスト教会が採るべき神学の在り方を積極的に提言した。この提言においてはじめて、明治のキリスト教会は学としての神学の在り方に対する、目をひらかれたといつても過言ではない。彼の新神学関係の所論のうち、もっとも建設的な提言であつた。

彼は「神学」と「信仰」とは無関係としたが、「神学」それ自体の効用を全面的に否定するものではなかつた。彼が否定した神学はあくまでも形骸化し固陋化した正統主義神学であり、自由かつ合理的な新神学こそ、信仰生活にとり有効であるとした。彼は次のように述べる。

神学も亦不用なる者にあらず。否信仰の生活の度を進め、其幸

福を増すに於ては、神学の効能亦甚だ大なりと云ふべし。(中略)學術彌進歩すれば、吾人の幸福も亦從て増進する者なり。

彼の神学と信仰の生活との關係も亦之に類する所あり。

金森は「神学」の進歩發展に平行して「信仰」生活も向上すると理解したのである。それ故彼にすれば神学は「日進月歩の神学」であらねばならなかつたが、旧神学は「徒らに先祖遺伝の旧式を守りて、其古文に拘泥する腐儒神学」にすぎず、同時代の日本のキリスト教会の大勢はこの「腐儒神学」の支配下に呻吟していると見なした。彼は「他の學術は日進月歩して、全く其面目を改め、各新調の衣服を着けて、第十九世紀の文明界に横行するに、独り神学のみは数百年來先祖相伝の衣服を纏ひ、さも恥かしそふに微行しつつある」事態はいつたい、何処に由來するのであらうかと問ひ、その理由を従來の神学自体の方法の欠陥に求め、學問としての神学研究の方法への検討に進んで行つた。

彼は従來の神学には「三大欠点」があると言ひ、それは「思想の公平」、「思想の自由」、「思想の大胆さ」を欠く点であるとした。そして真理探求を目差す者が、「其思想の公平を欠くときは、必ず僻見に落入り、思想の自由を失ふ時は、必ず頑固となり、大胆の氣象を欠くときは、逆も真理の新天地を開鑿する事難かるべし」であつた。金森は旧神学の方法的欠陥としてこの三点を指摘したのである。

第一何が故神学世界に思想の公平を欠くかと云ふに、多くの神学者は各自の宗派、若くは学派に属し已に歴史的の感情を有し、又境遇の束縛を受け居るにより、先入主となるの理に従

ひ、公平に彼我の神学説を比較して虚心以て其真理の存する所を発見せんとするの精神に乏し。(中略)若し夫れ真実に真理を発見せん事を務むる者は、其研究に於ては、彼我の区別又敵味方の感情を悉く去らざるべからず。只盛大の活眼を開ひて、宇宙を眺め只真理のある所に至て止るの精神なかるべからず。

次いで旧神学における「思想の自由」の欠如について、金森は以下のように述べる。

何故に思想の自由を欠くと云ふか。是れ他なし、徒らに聖書の文字に拘泥して、是れに奴隷仕するが故に、新旧約書の儀文の中に束縛せられて、自由自在に思想の天地に雄飛するを得ざるなり。聖書は素より神学書にあらず。又信仰の個条書にもあらざるなり。然るに多くの神学者は徒らに聖書の文句を引証して、己が立論の基礎となさんと欲す。(中略)道理に照らして其論の当否を問はず、只聖書の文意に適はざる故、直ちに謬説なりとして是を斥くるの風あり。是れ豈に聖書の文字を以て思想の自由を束縛する者にあらずや。思想の自由なる者は前後左右の外物より毛頭だも、束縛を受ける事なく只真理の雲の柱の導く儘に引かれ行き、其止る所に止るを云ふなり。始めより此書の中にある文意の外には、一步も踏出す事能はざるなりと云ふが如きは、素より束縛の甚しき者なり。

金森は旧神学における「思想の自由」の欠如の原因を、理性の光に照して聖書を批判的に検討することもなく単に神の啓示とみなして、絶対化し全ての行動規範をそこに求める保守性にあるとしたのである。

旧神学における欠陥の第三について、金森は次のように述べる。

何故に大胆を欠くと云ふか。是れ他なし神学の説と信仰の生活とは、甚だ密着なる関係ありて彼に過るときは是の命を失ふ者なりと過るが故、常に戦々競々として其説を立てんとするなり。彼等は譬ひ其心中に宿り給ふ真理の霊の導きて、快活なる新思想の彼岸に至るも、霊の命により身を思想の大海に浮べて真理の港に達せんとせず、却て因循姑息退ひて自己の旧説を墨守せんと欲するなり。

では何故、旧神学はこうした事態に陥入るのであるうか。金森はその理由を次のように述べる。旧神学の立場に立つ者達は、

神学説は信仰の生命に直接の関係ありと思ふを以て、危険を犯して真理の新天地を開墾するを欲せざるなり。如此き新説を信じたらんには、我が信仰に害はなきや、或はよし己れの信仰に害なきも他人の信仰に害を及すにはあらざるかと、信仰の生活上に心配あるより常に進取の気象を挫かれて、大胆に真理の發明を敢えてする事能はざるなり。

旧神学は人間理性の主體的な真理探求の努力を怠り、固陋化した教義に盲目的に追従するだけで、そこからは没主体的な信仰しかなかった得ないと金森は批判したのである。

これに対し彼はあくまでも理性の立場に立ち、人間の主體的な努力を強調する。それは次のような金森の宣言となつてあらわれた。プロテスタントの主義に則り、此世に於て無上の權威を有する神の代表者なしとするときは、我々個々人々各聖霊の導に頼て、各自に真理の所在を発見せざるべからず。是をなすや、多

少の過りに陥るは免れざる事なり。然ども過を恐れて勇敢の氣象を失ふも、亦何の益かあらん。如何となれば古より伝り来りたる神學說必ずしも純粹の真理にあらざるなり。只真理と誤謬の混合物たるに過ぎざるなり。今の儘にて先祖遺傳の神學說に止るも、尚誤謬の中にあり或は振ふて進むも多少過ちに陥るの憂ありとするときは、吾人は如何なる方針を取るべきか、余は断じて言ふ、大胆と勇氣とを以て進むに如ずと。

金森は神學研究における最終の抛り所は、人間理性の光によつて照された真理にこそ求められるとし、各自の主體的な責任において真理は発見されるべきであるとした。彼自身は理性の光に導かれて、大胆と勇氣をもつて新神學を真理として発見したのであった。

一方において、こうした意識は日本人キリスト者の自負として自主、独立のスローガンとなつてあらわれた。

今や我國に於る神學海の波浪は將に荒立んとする兆候あり。此時に於て吾人日本の神學者が注意すべき所は如何。即ち欧米人の覆徹に陥らざらん事なり。神學上の議論と信仰の生活とを混同せざらん事なり。已に彼れ是れの区分を明かにしたる以上は神學上の議論は最も快活に、最も公平に、最も自由に、最も大胆になさんことなり。我等日本の神學者は未だ宗派の奴隸とならざるなり。我等の前には先祖ありて、是れ彼れの神學說を遺傳したるにあらざるなり。我等は歴史的の感情を有せざるなり。我等は情実の絆に繋れたる者にあらざるなり。我々は独立独歩のクリスチャンなり。我々は此國に於る基督教會の祖先となるべき者なり。我々は日本神學の基礎を据べき者なり。

ここには真理に対する快活、公平、自由、大胆をもつて旧神學を圧倒し、新時代のキリスト教會を担おうとする青年金森通倫の自負と自信が躍如しているが、先にも指摘した如く、金森が真理という時、それは聖書に啓示された神の真理を、信仰の光に照された理性によつて獲得されたものではなく、人間理性の光のうちに捉えられた真理であつた。彼が「キリスト教と我々との命脈を繋ぐ者は即真理あるのみ」という時、金森のキリスト教は信仰の領域にとどまるというより、むしろ知性の領域に押しやられてしまつたのである。

ここに金森が内村不敬事件において、日本人の伝統的な心情に掬め取られて行つた理由があつた。金森はキリスト教信仰を知性の問題、倫理的態度一般へと解消させたのである。

金森は「神學の議論と信仰の生活」を次のように結んだ。「凡ての束縛を脱して、思想の天地に雄飛し、大胆に勇敢に險を冒し、難を越へ、神學思想の新天地を開懇すべし」

彼はこの結尾そのままを實踐して行つたのである。この論文こそは彼の新神學宣言の記念碑とでもいふべきものであつた。

同じく「神學」と「信仰」をめぐる議論から出發したにもかかわらず、一方は伝統神學の福音主義へ、他方は新神學の合理主義へと行きつく先は正反對であつた。

金森は以上のような見解の總決算として、『日本現今之基督教並ニ将来之基督教』を刊行したが、先にも指摘した如く、この著作はキリスト教界内部に一大センセーションをひき起し、多くの批判、反論が提出された中で、植村の批判は綿密かつ公平さにおいて、最も正鵠を射たものであつたが、新神學をめぐる両者の關係をみると

き、蓋し当然であつた。

おわりに

金森の『日本現今之基督教並ニ将来之基督教』に対する植村の批判、その他新神学問題全体に渉る彼の見解について、検討すべき多くの問題を残しているが、これ以降、植村は神学研究に対する金森の提言を真摯に受けとめ、快活、公平、自由、大胆に福音主義信仰の確立へと邁進した。金森が旧神学打倒に用いたスローガンを、植村は学としての神学研究に不可欠とみなし、福音主義確立のために用いたのである。明治二十年代中期における「罪の問題」に関する一連の論文は、新神学の合理主義に対する旧神学の福音主義の反攻ともいふべき勢いをもっていた。これらの論文において植村は「贖罪」を中核とする福音主義信仰を確立していったのである。

新神学はたしかに植村にとり克服の対象ではあったが、一方において新神学の問題提起なしに、彼の福音主義の確立もなかったのである。明治三四—三五年にかけて展開された「植村—海老名、キリスト論争」における植村の立場は、すでに新神学の問題提起に対する克服と、二十年代中期の所論において形成されていたのである。こうした問題については他日を期したい。

註

(1) 三並良『日本に於ける自由基督教と其先驅者』四五四—四五五頁。

(2) 『植村正久著作集』第四卷、二七一頁。

(3) この間の金森の思想的軌跡を史料に即して跡づけた研究は杉井六郎氏の論文「明治思想史における自由キリスト教提唱の

意味」(『キリスト教社会問題研究』第一一〇号)以外見当たらない。この論文は同時代のキリスト教ジャーナリズムにおける新神学論議を綿密周到に分析されて、きわめて示唆的である。

(4) 「説教も亦一の技術」(第一一五号、明治三年七月)「説教も亦一の技術(続)」(第一一六号同八月)「宗教社界の鎖国主義」(第一一八号、明治三年一〇月)「神学の議論と信仰の生活」(第二一〇号、明治三年二月)「カイク氏約翰伝論」(第二一二、一二三、一二四、一二七号、明治三四年一、二、四、七月)「使徒パウロの改信」(第二一九号、明治三四年九月)

(5) 『六合雜誌』の明治三年目次では「神学の議論と信仰の生涯」となっているが本文では(生活)である。

(6) 『植村正久著作集』第六卷、一一〇頁。

(7) 同時代人として山路愛山はこうした植村の態度について「余の知る所に依れば當時に在りて植村正久は曾て一たびは進歩派たるべき氣色を示したれども、中ごろより其の態度を一変して旧信仰に還り、正統派の一驍將として善く戦ひたりき。」(『現代日本教会史論』岩波文庫本、九二頁。

(8) 「神学上の波瀾」(『福音週報』第九号、明治三年五月)「植村正久著作集」第四卷二六三—二六四頁。

(9) 内村不敬事件をめぐる両者の対応については拙稿「内村鑑三不敬事件と植村正久」(『季刊日本思想史』第七号)参照。両者にとつて「新神学問題」と「内村不敬事件」は密接に関連するものであった。

(10) 植村は『日本評論』誌上に三回に渉って論評を加えた。(第三三三、三四、三六号、明治三年七月一〇、二五日。十月二六日)

(11) 「罪惡とは何ぞや」(明治二六年二月—三月)「われらの罪いかにして赦さるや」(明治二六年一〇—十一月)は『福音新報』誌上に七回に渉って連載された。